

## 論文要旨

### 1. イウ・ダニエル(中国)

#### 「箸から見る日本と中国の違い — 歴史・信仰と縁起・タブー —」

キーワード: 箸、使用意識、語源、信仰と縁起、タブー

#### 要旨:

現在、箸は日本でも中国でも食事中に欠かせない道具である。日本は箸だけで食事をする国と思われているが、中国では箸と匙を同時に使うのが普通である。

本稿ではまず、箸の歴史を通して、両国の箸が普段の食事に使われるようになる前にどのように考えられ、日本の箸と中国の箸(筷子)という文字がどのように変化してきたのかを見る。

次に、箸における日本の信仰と中国の縁起はどのような関連があるかを分析する。日本では箸は信仰にも関わり、箸で食べると神と交流することができるという考えがある。また、祝儀などの日に使われる箸「ハレの箸」、日常的に使う箸「ケの箸」について説明する。それに対して、中国では箸の発音が縁起がいいため、結婚に関することに使われ、地方と民族によって箸を使う習俗が異なることを示した。また、箸の素材は、結婚のときと葬式のとき使い分けられる。

最後に、両国の箸における特徴とタブーについて考える。両国の箸の長さや太さが違う理由を述べ、直箸、箸の置き方、割り箸などのいくつかの面から類似点と相違点について述べる。

以上のように、使用意識の変化と語彙の変化、信仰と人生、タブーの側面から箸が昔から今までどのように認識されてきたかを報告する。

### 2. 金 民愛(きむ みんえ・韓国)

#### 「銭湯文化の韓日比較」

キーワード: 銭湯、韓日比較、銭湯システム、関東・関西と岐阜

#### 要旨:

銭湯は日本の1つの文化だといっても過言ではないと考えられる。銭湯について調べるうちに、韓国の銭湯が日本の影響を受けたことと、日本でも関東と関西の違いがあることが分かった。

現在、韓国と日本の銭湯の数は減っている。そのため客に銭湯に来てもらうため、銭湯側では様々なことを行っている。筆者はそのような様々な努力も含めて「銭湯システム」と考えている。

本稿では、まず、韓日における銭湯の略史を述べる。次に「銭湯システム」のうちの代表的な3点(建物、番台、浴室の配列と背景絵)における関東と関西の違いを紹介し、関東と関西の間にある岐阜の「銭湯システム」の位置づけについて分析した。最後に、韓国と日本ではともに、自治体の協力を得て銭湯に来てもらうための方策が講じられているが、その方策を検討することで、現在の問題点(銭湯がなくなる原因)を考察してみた。

上記を踏まえた上で、日本人にとって銭湯はどのような意味があるのかを分析する。

### 3. クースワン・パークプーム(タイ)

#### 「現代おみくじ考 —「おみくじ」の形状とそれらに対する意識—

キーワード: おみくじの形状、紙のおみくじ、新規形状のおみくじ、おみくじに対する現代人の意識

#### 要旨:

日本のおみくじは、現代において著しく多様化している。本稿では、古代から現代までのおみくじの変化を追究し、形状の多様化を分析した。多様な工夫によっておみくじ紙の形状が変化し、新規形状も生まれた。おみくじの形状は現在3つ(紙、電子媒体、その他)に大別できるという結果に至った。更に、その3つの形状を細かく分類することができる。

また、おみくじに対する人の意識の考察も本研究で重視し、そのことに関してアンケート・インタビュー調査を行った。岐阜大学の学生を対象にしたアンケート調査によって、おみくじに対する現代人の一般的な意識の一例が分かった。更に、現代におけるおみくじの新規形状の生成は、若者をはじめとする現代人の意識に大きな影響があるだろうということを仮説として提示する。そして、現代社会においてそのような仮説が成り立つのか、本調査で検証する。また、おみくじに対する人の意識を更に詳しく把握するための意見も、岐阜県伊奈葉神社の神職者(権禰宜)へのインタビュー調査から得た。以上のことについて本論で報告する。

### 4. 孫 瑾(そん きん・中国)

#### 「織田信長ゆかりのまち」—岐阜市の「文化財戦略」—

キーワード: 織田信長、文化財、「岐阜市歴史的風致維持向上計画」、まちづくり、行政と市民

#### 要旨:

近世初頭の人物・織田信長の岐阜への影響は非常に大きく、岐阜市内に残っている文化財もきわめて多い。

岐阜市は、信長の関連文化財を発掘・整備・保存・管理し、そして広報を重視して「信長ゆかりのまち」をめざす町づくりの計画を進めている。それに比較して、同じく歴史的な文化財が豊富な中国の無錫市は、観光産業がかなり発展しているものの、文化財の活用は十分でなく、検討を要する面が多々あると思われる。

本論では、岐阜市が信長の関連文化財を発掘・整備・保存・管理・広報している現状、及び岐阜市の文化環境を分析し、「信長ゆかりのまち」のコンセプトを具体化する努力について考察する。また、行政側と市民側の双方の意見を聞き取り、この施策が市民にとってどのように支持されているのか(支持されていないのか)を考察する。

## 5. ダン・ティ・タイン・トウイ(ベトナム)

### 「日本とベトナムの保育所・幼稚園 一両国の問題点を中心に」

キーワード: 保育所・幼稚園、待機児童、待機児童ゼロ作戦、幼保一本化、日本とベトナムの比較

#### 要旨:

本稿は、日本とベトナムの保育所・幼稚園の運営形態を踏まえた上で、特に両国で起こっている保育問題を調査・分析することを目的とした。

日本とベトナムの保育行政では、保育所・幼稚園の扱い方に違いが見られる。日本では、保育所は福祉施設、幼稚園は教育施設であり、それぞれの監督機関が異なるため、対象児童や保育時間等にも相違が見られる。一方、ベトナムでは保育所と幼稚園が合併され、教育・訓練省によって監督されている。教育制度や社会的背景は異なるが、両国とも大都市部で認可保育所の数や保育士・教員の不足問題、認可外保育所の児童虐待問題等、共通の問題が存在していることが分かった。本稿では、特に、近年両国でひととき問題視されている「待機児童問題」を中心に、その問題の実態や発生要因を調査し、日本の「待機児童ゼロ作戦」を分析した。その結果、ベトナムが学ぶべきこととして、待機児童の定義の変更や「保育コンシェルジュ」の導入の必要性等が分かった。

さらに、両国の幼児教育問題を解決するためには①幼児教育施設を拡充すること、②規制をきちんと管理すること、③保育士や教員への勤務時間を軽減し、昇給の支援をすること等が必要であることを指摘した。

## 6. ヒュン・クリストファル(スウェーデン)

### 「現代の若者が用いる強意語 -「メッチャ」「チョー」等をめぐる状況-」

キーワード: 現代の若者語、強意語、使用頻度、使用意識、地域差

#### 要旨:

現代の若者は強意語として、「スゴイ」「スゴク」の代わりに「チョー」「メッチャ」を使用する傾向がある。本稿では、そのような表現を言語的・歴史的に紹介する。さらに、先行研究も紹介し、独自のアンケート調査を行う。

本稿では、若者の強意語の使用頻度・使用意識・強さの程度・丁寧度を目的として、アンケート調査を行った。調査の結果は、様々な興味深い点を示唆した。結果によると、筆者の予想通り、現代の若者の中では「メッチャ」の使用頻度が「チョー」を上回った。一方、強さの程度が高ければ、丁寧度が低いという筆者の予想と調査結果は違った。本稿では強意語の使用頻度・使用意識・強さの程度・丁寧度の調査からの結果を踏まえ、先行調査と比較し、考察を行った。

強意語の使用頻度・使用意識は時代によって異なる。若者語は流行り廃りがある。新たな語が常に作り出されており、「鬼可愛い」のような強意語も生まれている。いずれ、そのような新たな語が現在の「メッチャ」より頻繁に使われるようになるかもしれない。

## 7. マンコーソン・コーラパン(タイ)

### 「日・タイの若者のことわざの使用度と認知度」

キーワード: 日本・タイ、若者、ことわざ、ことわざの使用度と認知度、若者に影響を与えるもの

#### 要旨:

最近、ことわざを使う若者が少なくなっている。また、ことわざの意味や使い方などを知っている若者も多くはないように感じる。このような傾向は日本だけでなく、タイの若者も同じである。それは若者を取り巻く環境(家庭や社会)から影響を受けているためである。その影響を知るために、「日本とタイの若者のことわざの使用度と認知度」に関するアンケート調査を行った。対象は、岐阜大学とタイのカセサート大学に在学している大学1~4年生である。

アンケート調査では、若者のことわざの使用度と認知度を把握するために、「ことわざについての各自の体験」や、同義語のことわざを結びつけたり選択する「ことわざ検定」のような質問をした。また、両国の若者に影響を与えるものは何かを知るために、「ことわざの教え方と伝え方」や「ことわざ教育」に関する学習指導要領や指導案も調べ、それに基づいて調査結果を分析した。

その結果、若者のことわざの使用度と認知度には、教師の教え方だけでなく、学習道具(書籍、インターネット、テレビ)と身近な人々(家族・友人)がことわざを使うかどうかなども影響を与えていることが分かった。

## 8. 姚 瑶(よう よう・中国)

### 「中国の大学の「母語教育」について」

キーワード: 母語教育、教養教育、中日比較、理念と内容・方法

#### 要旨:

近年、中国の大学生には、母語能力が低下する傾向が見られる。様々な新聞メディアで母語教育の問題が注目されている。中国の大学の「母語教育」とは、「大学語文」という授業を中心にして、中国語を扱う大学での教育活動を意味する。いわば「母語教育」の「大学語文」という科目は、日本の「国語」のような役割を持っているのである。

本稿は、中国の大学の母語教育を中心に、日本の大学の教養教育と比較考察することによって、中国の母語教育における問題を明らかにすることを目的とするものである。筆者が中国と日本の教育を体験した経験を参考にし、資料、インタビューに基づいた研究方法を採用している。中国の母語教育の現状、問題点、これからの母語教育のあり方をめぐって、課題を追究してみる。

この研究を通じて、理念の面では、母語教育と教養教育には共通点があることが明らかになった。また、教養教育の教学組織、教学内容・方法・教材など方面から母語教育にもたらす啓示も建設的かつ有意義であると認識した。岐阜大学の教員へのインタビューから新たな視点を得、これから中国の母語教育はどのように進むべきなのか自分なりに考えてみたい。

## 9. 尹 ミレ(ゆん みれ・韓国)

### 「日韓における結婚の現状の比較 ―婚姻率低下の原因を中心に―」

キーワード: 日韓比較、未婚化・晩婚化、嗜好品化、高額な結婚費用

#### 要旨:

現在、日本では、少子化や高齢化、結婚に関する問題が社会問題としてテレビや新聞などで大きく扱われている。高齢化は、少子化が原因で発生しており、さらに、少子化は婚姻率の低下が原因となっている。実は、韓国でも同様の問題が深刻化している。これらの問題の根本を理解する第一歩が結婚の現状について知ることだと考え、両国における結婚の実態を調査した。

本稿では、まず、日本の結婚の仕方を近代以降四つの時期に分けて説明し、未婚化・晩婚化の現状について調査した。その結果、経済が成長するにつれて若者の結婚観が変わり、「自分にとって満足のいく結婚」を望むようになったため、結婚が「嗜好品化」したことが分かった。このように、若者の個人主義によって婚姻率が低下したことが明らかになった。

また、韓国における婚姻率低下の状況を理解するために、朝鮮時代の婚姻慣例を説明した。豪華な生活用品、相手の親へのお礼、新居の用意などによる高額な結婚費用が、現代の若者にも影響を及ぼしていることが明らかになった。韓国における未婚化・晩婚化・婚姻率低下の背後に物質主義があることを指摘した。

上記を踏まえ、日本は「婚活」を利用して結婚する若者を増やし、韓国は無駄な婚姻費用を省いて若者の負担を減らし、婚姻率を上げていくよう提言した。

## 10. 林 瑜佳(りん ゆか・中国)

### 「カラスへの見直し ―八咫鳥の姿から―」

キーワード: 三本足のカラス、八咫鳥、熊野、日本サッカー協会、現状のカラスへの見直し

#### 要旨:

日本では至るところでカラスの姿が見られる。しかし、カラスはけっして愛される動物とは言えない。ゴミを散らかし、腐肉や死体を啄ばむなどの光景により、カラスは日本では社会問題の対象になっており、むしろ悪鳥で、不吉な鳥だと言える。本稿は八咫鳥の姿から、現在人々に嫌悪されているカラスの別の面を紹介した上で、再度現実のカラスに戻り、新たな視点でカラスを見直すことを目的とする。

中国の古い伝説には太陽に三本足のカラスが棲んでいるとの言い伝えがある。まず、中国から伝来した三本足のカラスが八咫鳥というイメージで日本の歴史に登場し、太陽の神の使いとして昔の日本人に崇敬されていたという話を紹介する。また、八咫鳥の原郷である熊野という場所から、神鳥である八咫鳥が生み出された要因を分析し、昔の人々の熊野の八咫鳥に対する崇敬の心を読み取る。さらに、日本サッカー協会との関わりから、現代社会に息づいている八咫鳥の新たな展開を紹介する。

以上を踏まえた上で、日本社会におけるカラスの現状に戻り、カラスが起こす問題やカラスに対するマイナスのイメージを別の視点から分析する。現代の人々はカラスに対して、ただ表面的な見かけだけから好悪を判断しているが、そのカラスへの偏見を打破し、カラスを正しく理解することが大切だと指摘する。